「多言語記述のための主観性シンポジウム」報告書

開催日：2013 年 12 月 8 日（日）
会場：筑波大学　共同利用棟　A203
参加者数：30 名（教員 10 名、大学院生・その他 20 名）

趣旨説明

本シンポジウムの開催にあたり、小野正樹准教授（筑波大学、人文社会系）より、今回の目標、今回の研究会開催に至る「主観性研究」の流れが説明された。

今回の研究会の目標は、下記の通りである。

(a)「主観性」を満たす重要概念の選定を行い、その語法情報を記述するための研究を進める。

(b) 話者と聴者の関係で「主観性」が問題となる要因を記述するための研究を進める。

(c) 多言語を対照して、各言語の「主観性」が現れやすい項目を記述するための研究を進める。

なお、上述の目標に対して、「事態把握」、「伝達」という二つの位相の違いに注意しつつ、今回の研究会を進めていくことが、小野准教授により、付言された。

これまでの流れとしては、第 1 回（2012 年 11 月 11 日　於筑波大学）「人間関係と距離観」、第 2 回（2013 年 6 月 16 日　於中国人民大学）「主観性の諸相」で取り上げられた話題が確認された上で、本日の講演、ラウンドテーブルの概要が示された。

小野准教授による趣旨説明

会場の様子

澤田准教授による講演

廣瀬教授による講演

講演「日本語のダイクシス表現と視点、主観性」

澤田淳准教授（青山学院大学、文学部）による講演は、現代共通日本語におけるダイクシス表現の持つ視点制約・人称的性質が、日本語の歴史的変遷の中で発生・確立していくメカニズムを探るものであった。具体的には、授与動詞、移送動詞、敬語動詞、移動動詞、指示詞、敬語といった幾つかのダイクシス現象を取り上げられた。それらがいずれも、自己（話し手）の領域内の事物・事象と他者（聞き手、または、聞き手を含む話し手以外）の領域内の事物・事象とを言語的に区別する方向に意味・運用を変化させていったことが、主として古代語と現代語の史的対照の観点から提示された。合わせて、他言語（韓国語）、方言（出雲方言）との比較対照の視点から、現代日本語のダイクシス表現の相対化が試みられた。講演の中では、次に挙げるような事項が、検討された。

・授与動詞の運用の歴史（「くれる」、「やる」など）
・移転動詞の運用の歴史（「行く」、「来る」、方言用法の「来る」）
・移送動詞の運用の歴史（「よこす」、古代語「おこす」など）
・敬語動詞の運用の歴史（「いらっしゃる」など）
・「行為の方向付け」の「てくる」の運用の歴史
・敬語運用の歴史（相対敬語、絶対敬語など）
・指示詞運用の歴史（コ、ソ、アなど）

多くの事項を網羅する澤田准教授による講演の紹介として、ここでは、講演後の議論の中でも繰り返し言及されていた移転動詞の考察を挙げておきたい。話し手が発話時にいる聞き手のもとへの移動をCOME動詞かGO動詞のいずれで表すかは言語によって異なる。講演では、英語・日本語・韓国語の移転動詞の用例が紹介された。その上で、日本語では、「行く（GO動詞）」が一般的であるが、方言を見ると、聞き手領域の話し手への移動は「行く」でも「来る」でも表せることが、実例を通して示された。さらに、「行く」の運用は、話し手と聞き手との社会的な上下関係や対人的な親疎関係に影響を受けないが、「来る」は、移動先に相手が目上の者や、初対面などで良く知らない者である場合には使用できないという運用上の制約があることを言及した。この点について、澤田准教授は、他言語ではどうか（例えば、中国語の「来」の場合）などの問題提起を行った。その後、中国語、英語、日本語、韓国語それぞれの場合について、参加者との間で意見交換が行われた。

講演「言語使用の三層モデルと主観の客体化」

廣瀬幸生教授（筑波大学、人文社会系）の講演は、文法と語用論の関係にかかわる日英語の違いを記述・説明するための一般的枠組みである「言語使用の三層モデル」について、前半はその概要を示し、後半はその応用として、「主観の客体化」（他者の思いを話し手がどのように受け止め、表現するか）という現象について、特に英語を中心に論じるものであった。

はじめに、「三層モデル」について、「公的自己」（伝達の主体としての話し手）と「私的自己」（思考・意識の主体としての話し手）という観点を発展させた考え方で、言語使用は、「状況把握」、「状況報告」、「対人関係」という三つの層からなり、言語のもつ 自己中心性が英語のように公的自己にあるか、日本語のように私的自己にあるかによって、 三つの層の組み合わせが異なるとする理論であることが説明された。

次に、文法と語用論の関係を考えるための三つの観点が提示された。一つ目は、認知言語学的視点であり、主観性を巡るものである。ここでは、(1) 向うにバスが見える。［主観的把握］、（２）I (can) see a bus over there. ［客観的把握］の例を通して、日本語と英語の差異が紹介された。二つ目は、社会言語学的視点で、対人意識についての、日本語と英語による違いである。日本語には、今日は日曜日だ（今日は日曜日だよ、今日は日曜日です。今日は日曜日でございます）など、聞き手との社会的・心理的関係を考慮した表現が確認されるのに対し、英語では、その限りではない。そして、三つ目は、公的自己・私的自己の観点である。公的自己とは聞き手と対峙する伝達の主体としての側面であり、私的自己とは聞き手の存在を想定しない思考・意識の主体としての側面を指す。言語主体としての話し手を「公的自己」と「私的自己」という二つの側面に解体することが、ダイクシスなど、言語における自己中心性の問題を巡る日英語対照研究においては極めて重要なことである。

そして、言語使用の三層モデルについて、より詳細な説明が加えられた上で、下記のような話題が検討された。

- 公的自己中心の英語・私的自己中心の日本語
- 日英語の無標の表現形態（ I SAY TO YOU という遂行節を仮定する遂行分析、発話理由条件文）
- 状況報告と対人関係
- 公的自己中心・私的自己中心と文法的な人称
- 主観の客体化（認識的法助動詞、心理述語、問い返し疑問文、確認疑問文、修辞疑問文、反論疑問）

ラウンドテーブル

ラウンドテーブルでは、佐々木勲人准教授（筑波大学、人文社会系）の司会の下、次のような話題提供が行われた。

于栄勝教授（北京大学、外国語学院）「視点と日文漢訳を考える」
彭広陸教授（北京大学、外国語学院）「中国語と日本語の主観量表現の対照研究」
趙華敏教授（北京大学、外国語学院）「中国語から見る言語の主観性」
李奇楠副教授（北京大学、外国語学院）「中国語・日本語から見る言語の主観性」

上掲の通り、日本語の文章を中国語に翻訳する際、実際に生じた問題に対する、主観性の視点からの考察、「量」を巡る表現、中国語の「客観的把握」の在り方、中国語と日本語の対象考察をもとにした主観性の分析など、様々な視点から、主観性を巡る話題が提供された。

于栄勝教授は、翻訳論・翻訳教育の立場から、特に副詞の修飾関係や比喩についての問題点を指摘した。彭広陸教授は、主観を「主観量」として捉える提案を行い、中国語の動詞句、形容詞句表現を分析した。趙華敏教授は「客観的把握」「主観的把握」という概念を用いて、人称、授受表現、ダイクシスから、日本語・中国語・英語の現象を挙げ、対照を行った。李奇楠副教授は中国語における「主観」が日本語からの外来語であること、人称の点から日本語は人称の多様性があるものの、人称を問わず中国語では固定した表現になっていることから、日本語は他者を意識した表現となっていることをコーパス調査とあわせて報告した。

総括

沼田善子教授（筑波大学、人文社会系）により、本シンポジウムで話題となってきた事項についての確認がなされた上で、それぞれの言語において、主観的表現をどうとらえるのかという問題を考察する必要性が改めて確認された。

ラウンドテーブルの様子①

ラウンドテーブルの様子②